様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　6 月　7 日現在

機関番号：３０１０３
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009　～　2011
課題番号：２１５３０６０１
研究課題名（和文）　社会福祉援助実践における「省察」の構造と過程に関する研究

研究課題名（英文）　Research on the structure and the process of reflection in social work.

研究代表者
横山　登志子（YOKOYAMA　TOSHIKO）
札幌学院大学・人文学部・教授
研究者番号：00295916

研究成果の概要（和文）：本研究では、価値葛藤におかれやすい社会福祉援助者の「省察」が、実践における「感情」や「違和感」を契機とした一連の思考過程であることを指摘し、それを意識化できる研修・学習モデルとしてプロセスレコードを活用した省察の方法を提示した。

研究成果の概要（英文）：This research considered the function of reflection for the social worker who experiences value conflict in a variety of cases. As a result of interview investigation, the study shows the role of reflection, in decision-making, where a social worker's feelings and/or a sense of incongruity, become a catalyst leading the thinking process. A study/training method utilizing the Process Record was shown to be an effective method for considering feelings; a sense of incongruity; and internal conflict.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	300,000	90,000	390,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	200,000	60,000	260,000
総　計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学、社会福祉学
キーワード：社会福祉実践・省察・プロセスレコード

１．研究開始当初の背景

価値実践といわれる社会福祉援助実践にはさまざまな価値葛藤を生じやすい状況におかれることが多い。そのため、価値葛藤への対処がうまく機能しないとバーンナウト（燃え尽き症候群）や離職が高率で生じてしまう。しかし、他方で価値葛藤を乗り越えたところに援助者としての成長があることもまた事実である。従って、さまざまな価値葛藤といかに対峙し、対処するかが重要な実践課題となってくる。価値葛藤を経験する援助者からすれば、それはある種の感情経験でもあり、心理的な疲弊感も伴う。認知行動理論の立場からは、認知が変われば感情も変化することが指摘され、感情を契機として認知のありようを自覚し、変容させることの意義が見出せる。これを前提とすると、「感情」を契機とした援助者の省察が可能となり、それによって価値葛藤への建設的な対処が可能になると考えられる。本研究では、そのような省察のあり方を促進する研修・学習モデルを検討する。

２．研究の目的

本研究の目的は、社会福祉援助実践を担う援助者が、実践活動において生じる葛藤や困難場面においてどのような「省察」行為を行っているのかを明らかにするとともに、省察

を促進する独自の研修プランや教育方法を提案することである。

３．研究の方法

具体的な方法は以下のとおりである。

第一は社会福祉実践の理論であるソーシャルワーク理論の約100年の歴史を振り返り、理論が実践者の感情をどのように扱ってきたのかの言説を批判的に分析する。これにより、感情についての言説のオルタナティブを提示する。

第２は、「省察」の機能・構造を明らかにするために、価値葛藤を強く経験する社会福祉実践者の経験を主題にした質的研究を実施する。

第３に、「省察的実践」を促進するために、プロセスレコードを活用した研修・学習モデルを提示し、社会福祉士養成教育における実習指導で試行的取り組みを行い、その方法に関するメリット・デメリットや課題を明らかにする。

４．研究成果

(1) 社会福祉援助実践の理論であるソーシャルワーク理論史の検討から援助者の「感情」に関する言説分析を行った結果、管理・制御すべきものとして個人の問題へと帰属しながら規範的に感情を統御する必要性が強調されてきたことを明らかにした。また、限定的ではあるが近年になって、燃え尽き症候群との関連や感情労働の立場から、ワーカーの感情経験にも関心が寄せられていることを指摘した。しかしながら、「感情」の疲弊に関する弊害など「感情」のネガティブな側面への注目が中心であった。本研究では、「感情のシグナル機能」という独自の概念を生成し、「感情」を契機として省察を促進するような意識的な活用の道筋を提示した。

(2) 社会福祉実践における援助者の「省察」の構造と過程を明らかにするための質的研究を実施した。具体的には、こども虐待という葛藤の高い社会福祉問題を抱える母子生活支援施設の援助者の経験を、約２年の参与観察のデータ等をもとに、葛藤状況に注目して分析した。

結果から援助者は、養育者の立場と子どもの立場の対立、養育者に対する否定と肯定、介入・支援・見守りの状況判断の難しさ、スタッフ・ワーク上の挑戦のなかに投げ込まれていることを指摘した。また、これらの葛藤状況は容易に整理できない複雑な要因のなかで混とんとしており、援助者全員に否定的な感情や違和感が強く経験されていた。そして、葛藤の対処には３つの実践的方向性が見出された。第１は、養育者を理解しようとする意志からの撤退、第２は育児スキルへの教育的介入、第３は状況判断にゆだねるであった。多面的な省察が機能しないと、不適切と考えられるもの（第１の方向性）もあり、それ以外のものも、決してうまく進展したとはいえなかった。

以上のことから、援助者の価値葛藤の表現としてあらわれる否定的な「感情」や「違和感」を契機として、意識的に省察を発動させる必要性が明らかになった。

これらのことから、省察を通して、固定的で硬直化した「虐待するひどい母」「かわいそうな子」というカテゴリー化を問いなおし、「カッコにいれてずらしていく」というソーシャルワークの戦略的行為が重要であることを指摘した。そして、そのようなカテゴリー化の省察の契機（サイン）となるのが、自らに生じている感情や情緒的葛藤だと指摘した。

(3) 省察を意識的に促進するためのツールとして、プロセスレコードを用いた独自の研修・学習モデルについてまとめた冊子を独自に作成した。これは、社会福祉士養成課程に対象を絞り、教育に携わる教員数名に協力を得て、主に北米で活用されているプロセスレコードを用いた実習指導の方法を参考に、日本の現状に応じたかたちで検討して作成したものである。

プロセスレコードとは、二者以上の相互作用のなかで、どのような言語・非言語のやりとりがあったのかを事後的に再構成し、どのような生の感情や、認知、行動があったのかを振り返ることで、援助者としての自己理解や援助的コミュニケーションを学ぶ方法である。独自のワークシートをもとに、ある場面のやりとりを逐語的に記載し、同時にその時の感情や考え、行動を思い起こして記載する作業を行う。

手引きの内容としては、プロセスレコードを活用する教育的意義を先行研究と試行的取り組みのなかから提示し、実習前の展開方法、実習中におけるプロセスレコードを活用した指導方法とその具体的な例示、実習後の展開方法、および今後の課題を記載した。

具体的な例示のなかでは、これまでに試行的に行った指導例をもとに、実習生が記載したプロセスレコードのどこに注目し、どのようにコメントを行うのかについて詳細を記載した。

今後の課題として指摘したのは、実習３者（学生・実習指導者・教員）の共通理解を得ること、実際の活用のためには実習指導者への研修が必要であること、学生が意義を感じられるための説明と練習の必要性、実際に実習で役立つためのツールとしていくための活用方法の模索、プロセスレコードを書けない学生への対応である。

この冊子は、社会福祉士養成教育に携わる現場の実習指導者や教員に配布して紹介するとともに、この方法に関する意義や課題について検討を行った。その上で、教員および現場の実習指導者を対象に発表（第 21 回アジア太平洋ソーシャルワーク会議、早稲田大学）を行ったほか、実習指導者を対象とした会議で冊子を用いて研修を行い、活用への意識づけを行った。

加えて、プロセスレコードを用いた実習指導を、社会福祉士養成課程の履修者（学生）に試行し、特に技術面の実践力向上のために効果的であることを確認した。

以上の結果から、社会福祉士養成教育における活用可能性を指摘し、さらなる普及のための課題として、実習指導者が活用しやすくするための工夫と環境整備のための検討の継続が必要だと指摘した。

これらの一連の検討内容は、社会福祉士養成課程にとどまらず、現任訓練や現場研修においても有用なものとなると考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
横山登志子、奥田かおり、ソーシャルワーク実習における省察的実践の検討－プロセスレコードの活用－、ソーシャルワーク学会誌、査読有、第 19 号、2010、71-82P

〔学会発表〕（計１件）
横山登志子、向谷地生良、佐藤園美、奥田かおり、実践的思考を育てる実習指導－「プロセスレコードを活用した実習指導の手引」作成 Field Practice that increase practical insight: creating field practice manual by promoting the use of process record. 第21回アジア・太平洋ソーシャルワーク会議、2011年7月17日、早稲田大学（東京）

〔その他〕
冊子作成：
横山登志子、佐藤園美、奥田かおり、向谷地生良、『プロセスレコードを活用した実習指導の手引』、2011 年 6 月作成

６．研究組織
(1)研究代表者
横山　登志子（YOKOYAMA　TOSHIKO）
札幌学院大学人文学部・教授
研究者番号：00295916